

## 映像って、嘘じゃん！

## Artist

原口 寛子 HARAGUCHI Hiroko

筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程  
芸術専攻総合造形領域 1年

## Writer

池田 寛子 IKEDA Hiroko

筑波大学芸術専門学群  
芸術学専攻芸術学・美術史コース 3年

人為的なもの、それが映像のもつ性質だった。

色を変えたり、カットしたり、場面の順番を変えたり、編集の手が加えられることが映像の基本だ。そして、このように人の手が加わると、物事の印象がすごく変わることに気づく。映像は、編集者によって操作され、事実とは少し異なったものとなる。物事をそっくりそのまま映しているわけではない。原口さんの芸術活動は、この映像のもつ嘘っぽさとの戦いであった。

## 自分も作ってみたい

原口さんが美術への興味を強めたきっかけとして、高校時代に所属していた美術部の顧問の先生の影響があった。先生は現代美術が好きで、よく生徒たちに作品を紹介してくれていたという。これをきっかけに、それまで彼女が興味をもっていた平安時代などの古い時代の美術とともに、現代の美術にも彼女の興味は開くこととなる。そして、彼女は大学で美術史を学ぶ道に進む。

美術史を本格的に学んでいく中で、美術には多様な分野、技法があるというこ

とに彼女は改めて気づかされる。高校時代、美術部に所属していたとはいえ、その制作経験は浅く、新しい作品に出会う度にこの作品はどうやって制作されたのだろう、作者はどんな考えをもっていたのだろう、という疑問を抱くようになる。そこで、「自分も作品を作りたい」と、そう思うようになった。そんな彼女が初めて作品を出品したのは、構成展である。構成展とは、筑波大学の構成専攻の2、3年生が出品する展示会であり、彼女は、どんな作品を制作しようか非常に悩んだという。そこで頭に浮かんできたのが、先ほどの顧問の先生が紹介してくれたいくつかの現代美術作品、とりわけ、アニメーション作品であった。

## 努力が報われる表現方法

展示会に出すほどの作品を初めて制作する彼女にとって、映像は、努力をすれば報われる表現方法のように感じた。たくさんコマを作れば、それだけ細かく、長く、動きをつくることができるからだ。「いっぱい描いただけ、いっぱい動く」



《Square floor and carpet, light bulbs / 四角い床と絨毯、ボール球》(2012年2月)  
video installation 撮影：横山博之

カメラやパソコンなど機材さえあれば、特殊な技術がなくてもある程度制作ができるのも魅力だった。今思えば単純に考えすぎていたと反省するところもあるが、構成展に出品された彼女の映像作品は、先生方にほめられることとなる。そして、彼女は思う。「私、向いてるんじゃないかな」。その後は、授業はもちろん、先輩の撮影の手伝いや、大学の広報映像作成のアルバイトなどで、積極的に映像の技術を学んでいった。ほめられて伸びるタイプの彼女は、初めての展示会で、作家活動のスタートを切ったのであった。

## 虚像が映し出す事実

最初に述べたように、彼女が映像作品を制作し始めて気づいたのは、映像がとても人為的なものだという事。このことに気づいてしまうと、もうテレビなども見られなくなってしまったという。誰かの手が加わっている、「嘘のものじゃん！」と思ってしまうから。だから、自分の作品では、人の意思が働かないような、鏡の写りこみ、影などの虚像をメインにしているのだそう。虚像と言われるものを実写のまま残し、他の部分はアニメーションとして手描きで起こして、組み合わせるという手法。日常生活の中に潜む、人の手によってコントロールされることのない部分。それをメインとして映し出すことで、映像のもつ人為的な側面を拒否しようとした。《Storyteller》という作品の中に出てくる時計のアニメーションでは、針の影が実写で、その他は手描き。影の存在感が増し、針が実際に指してい



「First Fretting/ はじめてごねる」(2011年8月)  
筑波大学アートギャラリーT+ 展示風景

る時刻とはまた別の時間が存在するようである。目の前に分かりやすく差し出された情報だけが存在しているのではない、ということ語りかけているのかもしれない。

## 映像インスタレーション

さらに原口さんは映像作品だけを見せるのではなく、鏡などを一緒に設置して、空間を一つの作品として体験させる、インスタレーション作品というかたちで展示している。物事はいつも不定形でいろんな角度をもつものなのに、それを一つの映像という情報で捉えようとした瞬間に編集され、記号化されてしまう。つまり、映像のみでは嘘っぽさが拭えないと感じたのだ。だから彼女は映像作品を、一緒に設置した鏡越しでしか見られないようにした。虚像をメインとした映像を、虚像として見るのだ。鏡をのぞきこむ方向を変えるだけで、中に映る映像も変化する。一つの視点、固定された画面でしか見られなかった映像に、多視点という要素を加えたのだった。映像の窮屈な平面感を解消することによって、映像の嘘っぽさを軽減しようと試みたのだ。また、インスタレーション作品自体を撮影した映像も、そのインスタレーション作品の中に組み込んで放映することによって、「自分が今どこを見ているのか」ということを鑑賞者に意識させた。映像を見ながら今自分が実際に立っている景色も意識させることで、虚像と実像の世界の接点と成り得るのではないかと感じたからだ。しかしこの手法に取り組み始めた頃は、設置と映像の釣り合いが取れず、映像作品が設置の中に飲み込まれてしまうことがあったという。“映像作品に真実味を与



「First Fretting/ はじめてごねる」雑巾をしぼる映像作品の一部

える展示”ではなく、“映像作品が置いてあるインスタレーション”になってしまったのだ。

悔しい思いをした彼女は、この手法を、その後もコンペティション（以下コンペ）などで試し続けている。コンペとは、主に民間や公共団体が一定条件のもと作品や案を募るものであり、審査員によって評価される、いわば競争だ。2次選考で参加者の3分の2ほどが落とされるなど、厳しい面もあるが、審査員の評価も聞くことが出来るし、同じ出品作家たちとも出会うことが出来る。大学にはつながらない縁がたくさんあるので、積極的に参加しているそうだ。しかし、ペインティングなどのコンペはいっぱいあるが、映像作品は、ノージャンルのコンペにしか出すことができない。そうしたコンペの数は少ないので、探して、あったらとにかく出すようにしているという。そこで知り合ったらこまめに展示の案内を送るとか、逆に案内が来たら必ず行くなどして、その後もつながりを大切にしている。

## ユニットでの活動

原口さんは、2011年から同じ大学院の先輩である佐藤史治さんとユニットを組み、佐藤史治 + 原口寛子としても活動している。このユニットではお互いに感じる他者性を、遊びや習慣をベースとして映像にし、インスタレーションとして見せている。ユニットで最初に行った展示は、

筑波大学内にある T+ ギャラリーでの「はじめてごねる」であった。“1人でできることを2人でできなくする”をテーマに、多数の映像作品を配置した。それぞれの片手で協力して雑巾を絞ってみたり、みかんを剥いてみたりと一人では易々とできるのに、共同でやると難しくなるもどかしい行為の数々が映し出されていた。いろんな方向を向いた映像画面が、いろんな“もどかしい動作”を映すことによって、テーマの可能性を広げている。また、学内だけでなく「SHOW ROOM」という展示会を「あをば荘」のオープニング企画として行うなど、学外での活動も積極的に行っている。あをば荘は墨田区にある、使われていない古い集合住宅の一角を改装したスペースで、何かイベントをやりたいけれども場所がないという人たちへ貸し出すために新しく生まれた場所だ。「SHOW ROOM」では、あをば荘がオープンするまでの改装作業を「今まで」から「これから」へ切り替わる様子として撮影し、再構成したインスタレーション作品を発表した。

ユニットでの活動と、個人での活動。どちらも映像インスタレーションという表現を中心として続けていきたいという。空間も使うことで一視点という映像のもつ窮屈さを拭いとり、事実そのものに近づけていく。彼女の映像の嘘っぽさとの戦いは、まだまだ続いていくのであった。